

わたしの聖戦

◎◎女性が働くことについて◎◎91

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

「運」「不運」を考える

生きていくうえで「運」について考えてみた。

およそ半世紀、この世で過ごしてきて思うのは「運」をキーワードにしたとき人は次のように分かれるのではないかということだ。

①ほとんどずっと運がいい人

②ほとんどずっと運が悪い人

③運がいいときと悪いときが交互にやってくる人

の3タイプである。

多くは③に集約し、①や②は少数派だろう。だから、色々あっても人の幸せは総量でとらえると似たようなものだといわ

れるし、何となくそれで納得させられる。

ここ10年以上、みずから命を絶つ人が3万人を超えているが、そういう人々のほとんどが「自分は運が悪い」と思ったのではないだろうか。「運がいい」と自覚しながら死んでいく人はまずいないといっているだろう。

実際にすべての人が②であるとは考えにくいので、やはりその大多数は③だったように思う。③であれば、早かれ遅かれ

事態は好転するのだから、今しばらく待っていたら何とかなったかもしれないのに、それができずに、おそらく運から見放され

たという絶望の気持ちで事に及んだように思えてならない。

たまに②のように、ずっと運が悪い人も確かに存在する。しかし、そういう人が全員自死するわけでもないで、ハタからみて運が悪いように見

人間は未来永劫
元気でいることは
ありえないから……



えても、結構本人はそういうものだと思ってるのかと日々を過ごしているのかもしれない。

事態や自分を取り巻く状況をどう捉えるかは、どこまでいっても本人次第である。思わぬ病気に罹ったとき、運が悪いと考えるか、運ではなく自分の生活習慣が悪いと思うか、それとも今ここで頑張って克服できればよしとするのか、人それぞれだろう。病気になるって喜ぶ人が、一見悪いことばかりにみえるアクシデントも受け止めかたや解釈の仕方などでいうこともないまさらいうまでもない。

時々、病気や死は生活習慣ではなく運・不運に左右されるように思う、との発言がある。少なくとも半分はそこで決まると。正直私は、80%はそれだろう思っている。しかしあまりあからさまに口にする、話が進展せず困ってしまうので、そういうことは小声で言うしかない。しかし、考えてみれば人間は未来永劫元気でいることはありえないから、病気になるのは実はたいしたことではないのだ。問題は、それをどう受け止めてどのようにならるか、である。

最近、病気になるように苦心するよりも、病気になったときの心構えについて、あらかじめ考えておくほうがよほど大事だと思うようになった。

少なくとも、ほとんどの人は③であるのに、自分は常に運がいい、つまり①のタイプだと信じられる人が、一番幸せな人を送ることができるといえる。

イラスト・三浦義雄